
岡本太郎と文庫・新書による美術出版
—昭和30年前後の出版界と美術受容—

1950年代半ば、日本の出版界は戦後最大の不況下にあり、その打開策として出版社の軸足は、全集から文庫や新書などの小型の判型で手軽に読むことのできる安価で平易な内容の軽装版書籍に移り、各社から新レーベルが乱立した。文庫・新書の読者となっていたのは、戦前からの伝統的な知識階級的な読者に加え、戦後の新たな読者層として注目された児童、学生、婦人たちであった。それは美術の新たな受容層とも重なっている。

美術書の視覚イメージを重視する性格や、図版の印刷技術の向上も伴って、新興の文庫・新書では、専門家以外の一般の幅広い年代・職業の人々の関心を集め、読者の獲得が見込める美術が、重要なテーマとなっていたのである。1950年代に刊行された美術関連の文庫・新書レーベルには、例えば、美術出版社「少年美術文庫」、弘文堂「アテネびじゅつぶんこ」、みすず書房「原色美術ライブラリー」、講談社「講談社版アート・ブックス」などが挙げられる。1951年度の毎日新聞「読書世論調査」では、販売しやすい書籍の価格帯として、46.5%の書店が200円までと答えている。100円から150円を中心価格帯とする文庫・新書の優位性は圧倒的であった。

このような出版界を活動の主要なフィールドとした美術家が岡本太郎(1911~1996)であった。岡本のベストセラー『今日の芸術』(光文社、1954年)は、美術の啓蒙者、著作者としての岡本を象徴するもので、その新書版は1955年に刊行された。このころ、岡本の関心はモダンアート、アヴァンギャルド芸術の紹介から、美術鑑賞による新たな価値創造を担う日本に立脚した読者を求め、『日本の伝統』(光文社、1956年)以降は日本の伝統の探求へと転換する。

したがって本発表は昭和30年前後の美術関連出版の諸相と岡本の活動に注目して、各種読者調査、書評誌『日本読書新聞』の専門家による書評や一般読者からの書評募集、左翼運動の展開、さらには出版史研究の成果を援用しながら、専門家や愛好者ではない、一般の人々への美術の普及に美術関連出版が、特に文庫や新書がいかに寄与したのかを考察する。なお、視覚的な美術を扱いつつも、当時の出版は基本的には日本語を介して主に国内を対象にしており、文庫・新書の読者が西暦以上に親密に意識したであろう「昭和」の年代区分に注目して、そのローカル性についても検討する。出版界も岡本の活動も、昭和20年代から30年代への移行期は転換点であった。1955年の年間ベストセラー10冊中、4冊は光文社から発行されたもので、光文社は新書レーベル「カッパブックス」により新書ブームを牽引していた。出版社や編集者の戦略と岡本の芸術論は強く結びついていたのである。

以上によって、出版社・著者・編集者・書評・書店・図書館・読者などが構成する「読書空間」における美術とその受容の位置づけを探る。